

イエスにならう生き方を求めて
 悩みを持つ人々の痛みに寄り添い、
 その悩みを少しでも分かち合うことのできる
 教会共同体をめざして

日本カトリック司教団著 「いのちへのまなざし」
 増補新版より

第5回「貧しい人のための世界祈願日」
 (2021年11月14日) 教皇メッセージを読む
 「貧しい人びとはいつもあなたがたと一緒にいる」

誰も置き去りにしない世界を「だれと」とともに歩むのかを、このメッセージから読み取ることが出来ます。そのポイントを話していただきます。

教区事務局長補佐 崔周永チウジュウ

貧しい人びと 大事な存在
 教皇フランシスコは、メッセージを二つの軸で展開していきます。まずは、「貧しい人」の本質について、そして、私たちのことについてです。

回心 自分の中の貧しさに気づく

貧しい人は、こちらから施されたり、慈善行為によって憐みの対象にするものではありません。貧しい人は人間としての揺るぎない尊厳を持っていて、数字や統計で表れるものではなく、私たちに、神様の御顔を御見せてくれる福音の宣教師なのです(マタイ5・3参照)。貧しい人びとに近づくこと——イエスがなさったように共感を通し、なおかつ自分と貧しい人との同一化を通してこそ、私たちはそれが出来るようになるのです。ある女から高額のお香油を惜しみなく注がれたイエス(マルコ14・3参照)ですが、このイエスはご自分の十字架での死を見据えた、窮境に陥った人びとと同じ存在であると、私たちは認識するようになるのです。共感——ともに感じるからこそ、私たちは貧しい人との一体化にまで

進むのです。こういったイエスの振る舞いは、教皇が結論でおっしゃっているように「わたしたちも貧しい」という自己認識なしには到底出来ません。

貧しい人と私たちが同じなのだ、と言うのは、気をつけて理解すべきです。なぜなら、私たちは他者と全く同じだと感じることは難しいためです。教皇はこういった緊張を保ちながら、回心への呼びかけをされています。真の富は地上にあるのではなく、天に積むべきなのです。キリスト者の私たちに、開いた心で神の御声に耳を傾けるようにと促しているのです。今、世の中の人びとが追っている価値観に向かって、勇気をもって「いいえ、違います」と言えること、その真逆の生き方を選ぶことです。「悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1・15)。

「貧しい人びとはいつもあなたがたと一緒にいる」(マルコ14・7)。これは、神様の御顔に出会うのは貧しい人びとを通してという意味です。もし、私たちが

彼らを、世の中がしているように、ただの助けの対象とし、非難の対象にまで追いやる場合、私たちは決して、貧しい人びとの福音的本質はもろろん、私たち自身の貧しさにも気づくことができなくなるのです。教皇は、現代社会が生み出している、貧しい人びとのための政策や対処などが、あまりにも彼らを疎外していることに注意を喚起しておられます。これらを、「新しい貧困」という言葉を使い、私たちに根本から振り返って、自らを見直すようとおっしゃっています。

ここでは、貧困について、貧しい人びとの立場や状況を指すだけでなく、その意味を広げ、私たちのうぬぼれや無感覚といった、自分自身は決して貧しくないと思っていることこそ、福音の呼びかけ、つまり「回心」と遠く離れていることだとおっしゃっているのです。

肝心なことは、結局、他者、とりわけ、貧しい人びとのくらし共感が出来るか、勇気をもって自分を開いていけるか、自分の中にある貧しさに気づき、認めるところまで進めるかということでしょう。真に自由になれるかどうかです。

「貧しい人びとはいつもあなたがたと一緒にいる」(マルコ14・7)

貧困者をしっかりと受け止めながら、同時に活性化をどう進めるか
変わりつつある釜ヶ崎

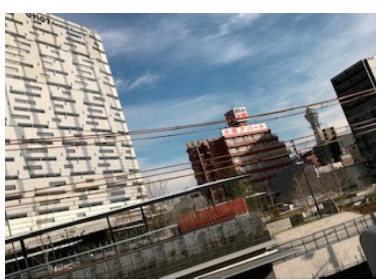


2021年11月22日(23日)に「正義と平和」全国集会大阪大会が開催されました。その分科会NO.14で「社会の底辺に置かれた人たちが生きる釜ヶ崎の現状に学ぶ」のテーマでZoomによる分科会を開催しました。

③ Share ④ Act
 のステップを踏んで、今置かれている立場で自分自身が出来ることは何だろうか？ 何を求められているか？ 各自が具体的な目標と活動計画を見い出す機会になったのではないだろうか。

① See
 ② Listen

南は鹿児島から北は北海道までたくさんの方が参加されました。中には貧困地区で既に支援活動されている方々も居られました。



オープン間近のリゾートホテル(左) JR新今宮駅ホームから望む

率。高齢化が進み、最近「労働者の街」から「福祉の街」に変わりつつあると言われています。ここ数年で釜ヶ崎は大きく変貌しつつあります。

長年、釜ヶ崎の支援に取り組まれている3名の方に発題頂き、「みことばと祈りの集い」では30年以上「ふるさとの家」で活動されている本田哲郎神父にご指導いただきました。また、「釜ヶ崎に学ぶ」と題して阿倍野教会の野村さんから報告がありました。

暴動、貧困ビジネス、反社会的勢力、臭い、汚い、釜ヶ崎が2012年、当時の橋下市長が、えこひいき行政と称して「西成特区構想」を発足させ、現在まで200億円近い資金が投じられ、医療センターと市営住宅が新設され、衛生環境や治安は見違えるように改善されました。行政とキリスト教協会、NPO法人釜ヶ崎支援機構等の支援団体や地域住民が「貧困者をしっかりと受け止めながら、同時に活性化を進める」との思いを一つにして真剣に検討が進められていることが感じられました。

「あいりん総合センター」跡地に建設予定の労働施設は従来の労働者の求人紹介に加え、生きることが不器用な人達を追い出すのではなく、就業機会創出、扶養照会なしの生活保護受給、高齢者住宅提供など「人が人として」生きることが出来るアイテムを備えた施設にするべく模索が続いています。

このような変化に伴いたくさんの「すきま」や「ひずみ」が出てくることも予想されます。

その中で私たちキリスト信者のなすべき事がたくさんあると感じました。

変わりつつある釜ヶ崎の現状を自分事として捉え、まずは釜ヶ崎に足を運んでみませんか？

(住之江教会信徒 有村 洋)

●吉岡基さん 基督教協友会共同代表
 宣教を前面に振りかざすと釜ヶ崎では受け入れられず、先人たちは苦悩し、つまづき、苦労の連続であった。地域に根ざす支援活動と共同の取り組み「～のために」から「～とともに」の志向で「こどもの里」開設、アルコール依存者、高齢者への支援を行う専門のグループが結成された。「人を人として」釜ヶ崎の現実を、教会や社会へフィードバックし問題を提起した。また、個別の支援問題の共有化に向けて努力した。

釜ヶ崎は絶えず国策や社会情勢の変化により翻弄されていたが、唯一状況を変えていったのは常に当事者の粘り強い「闘い」であった。

●松本裕文さん NPO 法人釜ヶ崎支援機構事務局長
 コロナ禍の中、「いのちを守る」との理念の下、行政・支援団体の連携でシェルターでの住民票登録、ワクチン接種が実施された。生活保護の扶養照会の緩和や、ホームレスにも特別定額給付金が支給された。

就労支援の幅の拡大と保証人無しで即日入居できる住まいの提供に力点を置いて活動している「ヨリドコオンライン」を立ち上げ、困窮者が必要な相談窓口や支援団体にたどり着けるようにしている。

●白波瀬達也さん 関西学院大学准教授
 阪神淡路大震災の復興時は日雇い求人は126万件だったが2018年は27万件に激減している。行政や支援団体、住民、地域団体等と連携しながら、トップダウンではなくボトムアップで「西成特区構想」が2013年から始動し、不法投棄や違法路上賭博は目に見えて減るなど生活環境は向上した。2018年から「再チャレンジできる町」のスローガンの下に高齢者の就業機会の開拓、居場所の再構築等が検討されている。今、注目されているのは「あいりん総合センター」の跡地利用である。「賑わい創出」のための大型ホテルも来年初めには開業予定である。地域再生に経済活性化は不可欠だが、今居る社会的弱者の排除に繋がらないようギリギリのバランスのもとに、まちづくりが進められている。